第3章

ひととまちとのいい関係

地域で学ぶ、また楽しからずや

◉泉区／いちょう小学校コミュニティ・スクール

事務局長として大忙しの中元さん。主婦の視点から情報収集につとめ、充実した内容のコミ・スクをめざしている

市民が中心となって運営するコミ・スクの原動力は、なんといってもボランティア。教える側、学ぶ側の熱い意欲が生涯学習を地域に密着させる

市民による、市民のための学校

「一芸の教授さん募集中！」。地域の小学校を利用しての生涯学習教室、いわゆるコミュニティ・スクールのよびかけに、ハイ、ハイと応募する地元の一芸先生たちあり。始まったのが「地域雑学大学」。「茶道」「折り紙教室」「新舞踊」「中国語講座」「ハーモニカ教室」。無料・格安、近所、気軽と三拍子そろった〝コミ・スク〟には、無理せず楽しく学びたいという市民が、きょうも三々五々集まってくる。

泉区の「いちょう小学校コミュニティ・スクール」は、市民による、市民のための学校である。

いま心の豊かさを求めて、何かを学んで向上心を満たそうとする人々が増えている。「市民生活行動調査」でも、現在行っている「地域・コミュニティ活動」として「教養を高める学習・研究活動」をあげる人は多かった。そこで、市民の身近な学習、スポーツ、地域活動の拠点として、横浜市では小・中学校の空き教室を利用してのコミュニティ・スクールの開設を進めている。

泉区と大和市の市境に位置する県営いちょう団地にある「いちょう小学校コミュニティ・スクール」は、その第一期校として、平成二年度にオープンしたもの。コミュニティ・スクールは、地域の人々に活動の場を提供するとともに、自主事業としてさまざまな学習メニューを企画しており、地域の人たちが相互に教え、学びあう「地域雑学大学」も、それらの事業のひとつである。

地域の力を活かす

「私は全くの専業主婦でしたから、果たしてうまくいくのかと教育委員会では不安に思っていたようですよ」と笑うのは、緑のおばさん（正式には婦人交通整理員という）を勤めていた関係から校長先生に声をかけられ、コミュニティ・スクールの事務局長を引き受けた中元すみ江さん。ほかに同時オープンした六つの学校の事務局長は、すべて校長OBだった。

だが、始めてみたら教育素人もうまく軌道にのせていた。

「私のような主婦が事務局長になってよかった点は、地域のみなさんが気楽に出入りできる雰囲気がつくれたことですね。近所の人がふらりと寄って雑談しながら、今度こんなことをしてみたいとか、健康づくりに何かしたいという話をしていくんです。そこから自主事業の企画が生まれることも多いんですよ」。元気印のおばさん代表のような中元さん、きびきびとコミ・スクについて語ってくれる。火・金と週二回の休館日にも、新しい企画の準備のため情報収集に出かけずにはいられないという中元さんにとって、コミ・スクは、実に入れ込みがいのある仕事のようだ。

コミ・スクの主体はあくまで市民。全体の運営には、地区代表、PTA会長などからなる二四人の運営委員があたる。自主事業の運営と施設管理が、中元さんとボランティアの仕事。いちょう小コミュニティ・スクールでは、事務局からの「お知らせ」は、自治会の回覧板を利用して地域に回してもらっている。地元組織との連携がよくとれているのも、ここがうまくいっている理由のひとつ。地域の力を活かしているのである。

子どもも大人も共に長く学びあう場に

いちょう小コミュニティ・スクールを利用している市民は、七割が女性。それも四十代後半から五十代後半あたりの人が多い。

地域雑学大学で毎月二回、二〇名ほどの受講者に裏千家茶道を教えている小川智恵子さんは、講師に名乗りをあげた理由をこう語る。

「自宅でもお茶を教えていますが、いま四十代、五十代の女性たちは、何かをやって

みたいという意欲がとても強いんですね。そのチャレンジ精神に協力したかったんです」

ちなみに会費は千円で、その中から支払われる講師料は三千円。ボランティアであるのは承知のうえだ。

「この教室はあくまで初歩。もっと深くやりたい人は別のところで道をきわめればいいし、ここで茶道の基本を覚えたから、今度は別のことをやってみたいという人は、それでいいと思うんですよ。生涯にわたって取り組めるものを見つけるきっかけのひとつに、この教室がなればいいと思っているんです」と小川先生。

“地域雑学大学”での茶道教室。地域の一芸先生が大活躍

小学校というのは、地域の子どもにとって磁石のような作用をするらしい。いつも所在なげな中・高生がやってきて、コミ・スクを覗いていく。その中には不良少年風の子たちもいて、こわがる大人もいたが、中元さんは積極的に声をかけた。次第に打ちとけてくる子どもたち。窓ガラスが割れたとき、すぐ応急処置をしてくれたのはこの子たちだった。

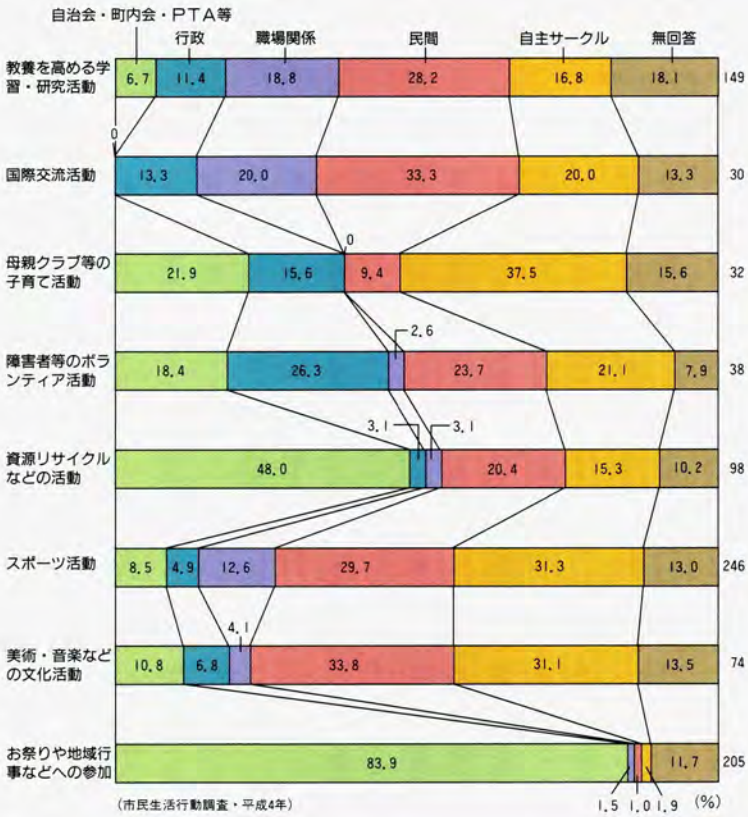
また、雨の降る日曜日に学校に来た子がいた。中元さんが声をかけてみると留守家庭の子どもで、「どこにも行くところがないから」という。学校に行けばコミ・スクが開いていて、そこには声をかけてくれる大人がいるかもしれない。そんな思いで顔を出す子どもがいることを知って、いま中元さんはコミュニティ・スクールを子どもにも開放したいと思っている。子どもたちにも、何か打ち込めるものが見つけられる場になればいいと。「幅広い年代のニーズに応えられるような、本当に地域に開かれたコミュニティ・スクールにしていきたいんです」と、中元さんの言葉に力がこもる。いちょう小コミュニティ・スクールがめざすのは、子どもも大人も共に学びあう、息の長い生涯学習の場のようだ。

今年、横浜市が行った「生涯学習に関する意識調査」では、ほぼ九割の人が「生涯学習に取り組みたい」と答えている。身近なところで、気軽に、生涯にわたって学べるコミュニティ・スクールの役割は、ますます高まってきたといえそうだ。

だが、コミ・スクを成功させるには、中元さんや一芸先生たちのような地域に埋もれた人材の確保とともに、大人ばかりでなく子どもも参加できるような幅広いメニューを持った、地域のすべての人々に開かれた生涯学習の場づくりが考えられなくてはならないだろう。

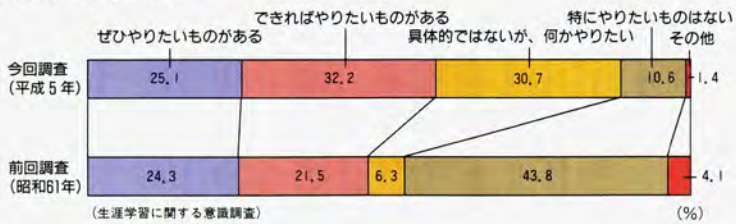
知るは一生の楽しみ。地域の情熱に支えられた生涯学習活動は、いま着々とその裾野を広げている。

●現在行っている地域・コミュニティ活動



(市民生活行動調査・平成4年)

●今後の学習意向について



(生涯学習に関する意識調査)

第3章

ひととまちとのいい関係

第二の人生にともす〝洋燈（らんぷ）〟

◉磯子区／四丁目洋光台クラブ

〈老人〉と呼ばれたくない〝このごろの〟お年寄りたち

「こんなに長く続くとは思っていませんでした。ここは書き手がたくさんいるからでしょうね」

お年寄りによる、お年寄りのためのミニコミ誌「らんぷ（洋燈）」の編集委員の一人、山本貞子さん(74)は、自分たちの活動にこんな感想をもらす。山本さんは、そこに歴史小説を連載している〝小説家〟でもあるのだ。

高齢化社会を迎え、かつて「余生」と呼ばれた高齢期を新たな活動期としてとらえ、積極的に生きようとする市民が増えている。

横浜市が行った「よこはま三万人アンケート」の中で、「二〇一〇年の望ましい高齢期の過ごし方」を複数回答で聞いたところ、一位は「旅行を楽しむ」で六一・二%、以下「趣味やスポーツをする」(六〇・七%)「友人や近所の人たちとのつきあいを楽しむ」(四〇・六%)が続き、活動的な高齢期をイメージしている人の多いことがうかがえた。いまや平均寿命八十歳の時代。長くなった第二の人生をどう過ごすかが、個人にも社会にも、大きな課題となってきたのである。

すべてが手作りの“らんぷ”。読む人にその努力と熱意が伝わるミニコミ誌だ

「最近はインテリのお年寄りが増え、〝老人〟とひとことでくくられるのを嫌がるので、〝老人クラブ〟の会員はなかなか増えない傾向があるんですよ」というのは、磯子区洋光台にあるシルバーエイジの会、「四丁目洋光台クラブ」で会長を務める林辺稔さん(84)。

現在、横浜市には一七七〇の老人クラブがあり、会員は一二万人を超えているが、加入率は減少の一途をたどっているのが実情だ。その中にあって、健やかに老いを生きるための仲間づくりに励んでいるのが四丁目洋光台クラブである。先の「らんぷ（洋燈）」は、会員獲得のためのPR誌として、平成元年に創刊されたものだ。

クラブは、昭和四十八年に会員数五二名で発足。会員はなかなか増えなかったが、自治会館ができたことと、ミニコミ誌「らんぷ」という地域のお年寄りをつなぐメディアが生まれて、いまでは会員も七五名となった。最長老会員は九十三歳！

手づくりミニコミで未来を先取り

ミニコミ誌「らんぷ」は〝洋燈〟とも書く。これは、洋光台の〝洋〟と、文明開化の象徴であるガス燈の〝燈〟からとられたもの。「若い人向けの情報誌は多いが、年寄りも年寄り向きの料理や健康づくりなど、身近な話題がのったものがほしい。そう思っていたら、たまたま会員の中に元編集者がいたので、それなら自分たちで、自分たちが読みやすい情報誌をつくろうとなったんです」と発刊のいきさつを語る林辺さん。このあたりのセンスと実行力はなかなかのもの。初代編集長が病に倒れ、一時は休刊かとあやぶまれたこともあったそうだが、同じく編集経験者の斎藤素絵子さん(58)の参加をえて無事継続、現在にいたっている。年四回の刊行で、今年二月には十四号をかぞえた。

「らんぷ」の内容はバラエティーに富んでいる。B五判十二ページの冊子の中には、巻頭エッセイから始まって、旅行記、随筆、短歌、俳句、クラブのお知らせ、料理メモ、連載小説などがぎっしり。実用記事は「夜間に尿の近い人が朝まで安眠できる家庭薬の作り方」とか「上手な医師とのつきあい方」「自助具の作り方」など、すぐ役に立つものばかり。健康のための日頃の心がけを要領よくまとめたコラムも光る。

こうした記事は、すべて会員が分担して書く。「たくさんの人に気軽に読んでいただけるものにしたい」という斎藤編集長のもと、編集会議は三カ月に一回開かれている。編集委員は一三名。クラブの役員全員がつとめ、それぞれが持ち寄った企画を出しあい、テーマを決めて会員に執筆を依頼している。「頭と手を使うので老化防止にも最高」と山本貞子さん。発行部数は二〇〇部。資金不足を補うための広告取りも、会員の仕事である。

「らんぷ」は手配りが原則だ。「みんなで苦労してつくったミニコミ誌。ぜひ読んでほしいですからね」というのは、クラブの草分けの一人、前みつさん(69)。配布を中心に活動している。できるだけ多くの人と顔

見知りになり、クラブの楽しさを直接伝え、参加者を増やしていくための作戦という。

「らんぷ」の発行は、クラブの活性化にも結びついている。以前のクラブは、月二回の「生きがい作業」（横浜市の委託を受けてクラブ員が近くの公園などを清掃するもの）が終わると、自治会館でお茶を飲んで解散するだけだった。しかし、「らんぷ」の誌面を使っての呼びかけにより、いまでは誕生会、健康講座、料理教室、旅行会などの催しや、社交ダンスや体操、俳句や囲碁、さらにはボランティアなどの同好会活動が活発にくり広げられている。

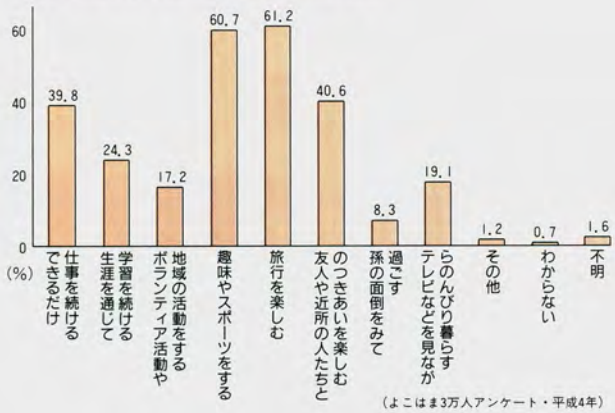
講師は仲間うちで間に合うのも、積み重ねた経験の豊かさがものをいうこの世代ならでは。また、幼稚園や小学校との交流会など、孫の世代とのふれあいも楽しんでいる。四丁目洋光台クラブの会員たちはもう、「二〇一〇年の望ましい高齢期の過ごし方」を実践してしまっているのだ。

地域活動はシルバー世代に支えられている感さえあるほど、いま潑剌（はつらつ）と高齢期を過ごすお年寄りが増えている。従来の〝お年寄り〟像は、そろそろ見直しの時期にきているのは確かなようだ。介護を必要とするお年寄りはもとより、元気なお年寄りも安心して充実した日々を過ごせるように、横浜市では老人クラブの助成やシルバー人材センターなどを通して、熟年市民の活動のあと押しをしている。

現在は高齢化率の低い横浜も、二十一世紀には本格的な高齢化社会を迎えるが、活力ある福祉社会の形成にはシルバーパワーの存在がものをいうのは間違いない。

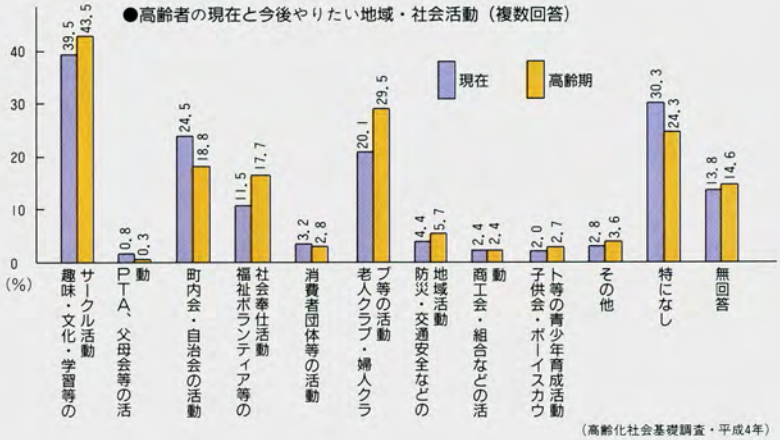
3ヵ月に1回開かれる編集会議では、和気あいあいとした雰囲気のなかで、持ち寄られた企画の検討や意見交換が繰り広げられる

●2010年の望ましい高齢期の過ごし方（複数回答）



（よこはま3万人アンケート・平成4年）

●高齢者の現在と今後やりたい地域・社会活動（複数回答）



（高齢化社会基礎調査・平成4年）